教育コラム「愛のかけはし」：１９６号

平成３０年　２月
江差町教育委員会
学校教育課

『イタリアの生徒のメッセージ』

イタリアの中学校を参観して深い感銘を受けたという人の話を紹介します。
その人が日本からイタリアへの教育視察団の団長として、人口５万３千人ほどの小都市の中学校を訪問したときのことだそうです。

訪問される側の中学校の校長先生が玄関まで日本の訪問団を出迎え、講堂まで案内してくれました。講堂のステージの上には、白いシャツに赤いネクタイをつけた男女の生徒が並んでおり、ステージまえの最前列に日本からの視察団が席をとりました。
イタリア人の校長先生が「皆様への歓迎は、学校の主人公である生徒たちがします。」とにこやかに言うと、ステージ上の一人の女子生徒が一歩前に出てスピーチをしたそうです。
「宗教や文化、言葉の違いは、私たち若者にとって明日への障害にはならないものであり、友情はこのような違いを超えて生き続けるものです。今、世界にはさまざまな問題が生じていますが、すばらしい明日を築くために私たち若者は努力をしていかなければなりません。これが、私たちイタリアの生徒から日本の生徒たちへのメッセージです。」

この格調高い見事な言葉に、その人は我を忘れて女子生徒の顔を見つめていたそうです。
続いて音楽の先生のピアノ伴奏によって、ピアニカで３曲ほどの演奏が披露されたそうです。日本の歓迎の仕方と同じなんだなと思いながらも、その人は先ほどのスピーチを心の中で反芻していたそうです。それほど深い感銘を受けたというのです。

今は、まさに国際親善の時代です。イタリアの生徒のメッセージにあるように、これからは若者が中心になって、さまざまな困難を克服し、努力をしていくときです。
しかしながら、世界中の国の人々となかよくしましょうと言葉にすることは簡単でも、実際にはなかなかその通りにはいかないことも多々あるようです。
過去の歴史が今なおずるずると引きずり続け、その国の出方によっては、これから先そんな国のことを認めたくないとか、その国の人だけは許し難いなど、特定の国に対してわだかまりを持ってしまうこともあります。
また、国民の団結を強固なものにするための手段として、他国を憎むようにしむける教育を今でも行っている国もあります。そのような教育を受けた子どもたちは、正しい国際感覚を身につけるなどということは、到底無理なことと言わざるを得ません。

少なくとも我が国においては、このような偏見を子どもたちに植え付けるようなことがあってはなりません。
国と国とのあらゆることが起因となって生じる対立や関係性など、事実は事実として受け止めつつ、さらにその先をどうするのかということを子どもたちに考えてもらうようにしなければなりません。

これからの国際親善を進めていく上で必要なのは、あらゆる偏見や障害となっていることにしっかりと目を向け、それらを乗り越えていくことの難しさを考えつつも、さらにあるべき姿を追い求めていこうとする強い決意ではないかと思います。

ぜひ我が国の子どもたちにも、イタリアの生徒たちのように胸を張ってメッセージを述べることができるようになってもらいたいです。そして、お互いが自己を確立しながら相手を尊重する、それによって真の友情を育みながらすばらしい明日を築いていってもらいたいものです。